OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「けし粒小説」とその時代 : 敗戦直後の「朝日新聞」大阪版および名古屋版の創作欄
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	阪大近代文学研究. 2018, 16, p. 59-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68150
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《研究ノート》「けし粒小説」とその時代
――敗戦直後の「朝日新聞」大阪版および名古屋版の創作欄

斎藤 理生

本稿では、一九四六年から四七年にかけて、朝日新聞大阪本社から発行されていた「朝日新聞」大阪版および名古屋版に掲載されていた「けし粒小説」の素描を試みる。

戦争末期から敗戦直後の新聞は、物資不足、輸送力不足のために、朝刊のみ、二頁しかなかった(1)。一方で、報道されるべき出来事は枚挙に暇がなかったし、社会情勢は刻々と移り変わっていた。そのため大手の新聞は、定番だった連載小説を、かつてと同じようには掲載できなくなっていた。

たとえば大佛次郎『丹前屏風』は「毎日新聞」に一九四五年九月一四日から連載されたが、しばしば休載になり、結局一一月一三日に二九回で中絶している。藤澤桓夫『彼女は答へる』は「読売新聞」に四五年一一月一日から連載されたが、一二月三一日に、三六回という短さで終わった。「読売新聞」で次の連載である貴司山治『愛の歌』（一九四六・四・一八～七・五）が始まるまでは三ヶ月以上の空白があったし、『愛の歌』に続いた織田作之助『土曜夫人』（八・三〇～一二・六）までの間も二ヶ月近く空いた。「毎日新聞」には、『丹前屏風』中絶後は、四七年八月一日から始まった林芙美子『うず潮』まで連載小説は掲載されなかった。「朝日新聞」に至っては、四四年一〇月二五日から連載された大佛の『乞食大将』を四五年三月六日に打ち切った後、四七年六月まで連載小説を掲載しなかった。

一方で、一九四六年頃から、大手の新聞に代わる新しい新聞が、地方を中心に次々と創刊された。敗戦直後に新しく創刊された新聞、いわゆる新興紙には、売り上げの増加や他紙との差異化をねらって、多くの小説が掲載されていた。たとえば織田作之助は、京阪の新興紙で実績を上げたことが「読売新聞」への執筆につながったと推測される(2)。先にあげ

た大佛、藤澤といった戦前戦中から全国紙で新聞小説をヒットさせた作家たちも、この時期にはしばしば新興地方新聞に小説を連載した(3)。

未曾有の混乱期において、人々には、虚構を楽しむよりも先にしなければならないことが多かったことは想像に難くない。しかし、衣食住にも事欠くような現実に直面していたからこそ、目の前の世界を一瞬忘れさせたり、新鮮な目で見つめ直させたりする虚構が求められてもいたようなのである。

そのような需要に応える形で、朝日新聞大阪本社が設けたのが「けし粒小説」というシリーズであった。一見コラムのように映る小さな創作欄に、原稿用紙一枚＝四〇〇字程度で書かれた一話完結の小説が掲載された。ここに一九四六年から四七年にかけて、月に一～三回、月曜日の主に第二面に、当時の中堅から若手にあたる人気作家が起用され、二七作品が掲載された。以下にその掲載日とタイトル、作家名を掲げる。

一九四六年

六月　三日	けし粒コント	時間	藤澤桓夫
六月一〇日	けし粒小説	実感	織田作之助
六月一七日	けし粒小説	ぜいたくな平和	阿部知二
六月二四日	けし粒小説	月は見てゐる	中山義秀
七月　八日	けし粒小説	戦争と平和	倉光俊夫
七月一五日	けし粒小説	誘惑	林芙美子
七月二二日	けし粒小説	柳のある川土手	藤原審爾
七月二九日	けし粒小説	女の一生	藤澤桓夫
八月　五日	けし粒小説	ある女の素描	舟橋聖一
八月一二日	けし粒小説	朝	平林たい子
八月一九日	けし粒小説	美醜	岡田禎子
八月二六日	けし粒小説	薬局	織田作之助
九月　九日	けし粒小説	恋文	網野菊
九月一六日	けし粒小説	子供の議会	長沖一
九月三〇日	けし粒小説	再会	若杉慧
一〇月　七日	けし粒小説	蛙料理	久生十蘭
一〇月一四日	けし粒小説	将棋	高木卓
一〇月二八日	けし粒小説	秋	倉光俊夫
一一月　四日	けし粒小説	復員	坂口安吾
一一月一一日	けし粒小説	たそがれの挿話	劉寒吉
一一月二五日	けし粒小説	海	村山知義
一二月　二日	けし粒小説	勲章	船山馨
一二月一六日	けし粒小説	未亡人	芝木好子

一九四七年

一月　六日	けし粒小説	初雪	大江賢次
一月二〇日	けし粒小説	海の見える窓	白川渥
二月一〇日	けし粒小説	阿片	井上友一郎
二月一七日	けし粒小説	クラス会で	小山いと子

作之助の二つの作品や、久生十蘭の作品など、従来から存在を認知され、個人全集に収められてきた作品もある。しかし坂口安吾（4）や平林たい子の作品など、これまでに刊行された全集に収録されておらず、年譜等にも記載されてこなかった作品も含まれている。

林芙美子の作品も、『林芙美子全集』（文泉堂出版、一九七七）に未収録で、第一六巻に収められている今川英子作成の「年譜」および「著書目録」にも記載がない。森英一「林芙美子資料紹介」（5）や浦野利喜子・久保卓也「林芙美子全集に未収録の作品について　附資料　林芙美子全集（文泉堂出版）未収録作品リスト」（6）にも挙げられておらず、廣畑研二「林芙美子拾遺」（7）でも紹介されていない。「けし粒小説」のサンプルとしての意味も込めて、この林の作品のみ、以下に本文を掲げておく。

誘惑　　林芙美子

長雨で、河には水量がましてゐた。
河ぞひの唐もろこしが、雨風にゆれてゐる。
「はじめに、どつちが誘惑したのよ？」
「さア、それはわからないわねえ……」
「だからさア、兄さんがいつてた、あの話ね、鶏が卵を生んだけど、鶏は、以前は卵だつたつて、その卵の親は鶏で、鶏は卵だつてどつちがさきに生れたのつて……その話とおんなじぢやアない？誘惑つてそんなものよ、ねえ……」

泥濘の道を歩いてゐて、私は、ふつと後を振り返つた。白いセーラー服の、おかつぱの女学生が三人。雨に濡れながら、熱心にしやべつて来る。思ひがけなく、あまりに小さい少女達だつたので、「誘惑」といふ言葉が、虹のやうに、急にすつと美しく私の瞼に燃えた。

石神井行きの、西武線の電車が、轟つと、唐もろこしの畠の向ふを、白く走つてゐる。

さて、先に名前をあげた作家の他に、太宰治も原稿を依頼されてはいたようである。それは『太宰治全集別巻』（筑摩書房、一九九二）に収録された「創作年表」からうかがえる。「昭和二十一年」の「八月号」への依頼が列挙された中に「コント　朝日新聞　1」と記されて、執筆されなかったことを示す線が上から引かれているのである（一七八頁）。

また、織田作之助が右記の「実感」を執筆した頃の姿が、重光誠一によって回想されている（8）。重光は、作之助が『それでも私は行く』（「京都日日新聞」一九四六・四・二六～七・二五）を連載していた頃に「大阪ビルの八階の、ぐらすぷ・らいぶらり社」で作之助に出会ったという。重光は「いま、朝日（新聞）のけしつぶ小説を書いてきたんや」と

言って「編輯室の机のうへで、さらさらつと原稿用紙一枚の小説を書いてきた模様」を語る作之助の姿を書き留めている。

なお、作之助の各種貴重資料が保管されている大阪府立中之島図書館織田文庫には、「けし粒小説」の原稿料の領収書が所蔵されている。作之助は、四六年九月四日に、朝日新聞大阪社から稿料一一五円（税金として三〇円一〇銭、正味八四円九〇銭）を受け取ったことがわかる。おそらく、他の作家たちに対する報酬も一律か、これに近い額であったろう。

「けし粒小説」は、小山いと子の作品を最後に姿を消す。四ヶ月後、石坂洋次郎の『青い山脈』（一九四七・六・八～一〇・四）(9)の連載が始まり、人気を博す。以後、連載小説は戦前と同じように「朝日新聞」の主軸となり、一年弱のあいだ大阪版と名古屋版の紙面を飾った「けし粒小説」の多くは忘れられていったのである。

注

（1）憲法発布の翌日など、稀に四頁になることもあった。しかし紙不足のためにタブロイド判と言われる小さなサイズになることもしばしばあった。

（2）作之助が一九四六年に書いた新聞小説については、拙稿「織田作之助『それでも私は行く』論――「京都日日新聞」を手がかりに」（「国語と国文学」二〇一二・一〇）、「織田作之助『夜光虫』論――「大阪日日新聞」を手がかりに」（「国語国文」二〇一五・一二）、「織田作之助『土曜夫人』論――「読売新聞」を手がかりに」（「語文」二〇一七・二）を参照されたい。

（3）大佛次郎は『姉』を「中京新聞」に一九四六年八月一日から九月三〇日まで六〇回、『迷路』を「京都日日新聞」に四六年一一月一日から四七年一月二五日まで七四回、『幻燈』を「夕刊新大阪」に四七年九月一五日から四八年一月九日まで一一四回連載した。「毎日新聞」に連載されて代表作となった『帰郷』（一九四八・五・一七～一一・二一、一八四回）は、これら地方新興紙での積み重ねの後に書かれたものである。また、藤澤は『花言葉』を「大阪日日新聞」と「九州タイムス」に四六年四月八日から五月二三日まで三五回、『秋草問答』を「夕刊新大阪」に九月二日から一一月三日まで七五回（「夕刊新九州」では九月一二日から一一月一三日まで）、『薔薇は語りぬ』を「神戸新聞」に四七年一一月五日から四八年二月一八日まで一〇四回連載した。「朝日新聞」で『私は見た』（一九四八・二・一五～七・八、一四四回）を連載するのはその後である。

（4）坂口安吾「復員」については「新潮」（二〇一八・四）の「新発掘・坂口安吾「復員」とその背景」も参照されたい。

（5）「金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要」二〇一一・二

（6）「福山大学人間文化学部紀要」二〇一二・三

（7）「日本古書通信」二〇一七・一～一二

（8）重光誠一「織田作之助ノート」（織田作之助『可能性の文学』カホリ書房、一九四七）

（9）「朝日新聞」大阪版及び名古屋版では六月八日から始まっているが、東京版では九日から始まった。

〈付記〉本研究はJSPS科研費 17K02450の助成を受けたものです。

（さいとうまさお／本学准教授）